

# 令和4年度（2022年度）に瀬田川上流水域で発生した チャネルキャットフィッシュ幼魚の個体数

石崎大介・山本充孝

## 1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加し、洗堰上流の瀬田川や琵琶湖南湖においても生息が確認されている。2019、2021年と過去2か年において洗堰直上の水域において標準体長（以下、体長）約200mmの1歳魚と推定される幼魚が多数採捕され、水域内での繁殖が示唆されている。適切で効果的な駆除を行い、漁業被害を未然に防ぐためには、対象種の生息量を把握する必要があることから、2022年に当水域で発生した幼魚個体数を推定した。

## 2. 方法

洗堰上流においてチャネルキャットフィッシュの採捕が集中している洗堰から京滋バイパスまでの約1.5kmの区間において、水産試験場が実施した延縄調査および滋賀県漁業協同組合連合会が実施した駆除事業における採捕データを用いてデルーリー法により、個体数を推定した（図）。2019年以降の周辺での採捕状況からこの水域から調査期間中に個体の逸出はないと仮定した。2021年生まれと推定される体長約200mmの幼魚は2022年7月1日から11月22日まで採捕された。しかしながら、例年1歳魚は9月からまとまって採捕され、11月以降は水温の低下とともに採捕されなくなることから、本調査は十分に加入が終了し水温低下による採捕効率への影響がないと考えられる9月および10月に実施した。期間中14回の調査で採捕された体長177～279mmの18個体を同一年級群の幼魚として解析に用いた。各回の針数は異なっていたことから、対象水域での採捕数を針数で除して

CPUE（採捕数/針数×100）を算出し解析に用いた。

## 3. 結果

調査期間当初の発生個体数は24個体と推定され、調査終了時は6個体が生息していたと推定された。2019年の同水域での幼魚の発生個体数は約200個体、2021年は54個体であり、両年と比較して幼魚の発生は小規模であったと考えられる。また、ピーク時のCPUEも2019年や2021年のピークと比較して小さく、妥当な推定値であると考えられる。これらの幼魚は1歳魚と予想されることから、2021年に繁殖したものと予想される。2019年、2021年に続き2022年も幼魚の発生を許してしまったが、発生量が他年に比べ少なくなったのは、同水域で実施されている駆除事業により親魚の生息が低く抑えられている可能性がある。また、調査終了後も6個体の幼魚が生息していたと推定されていることから、駆除事業を継続しこれらが成熟する前に駆除することが必要である。

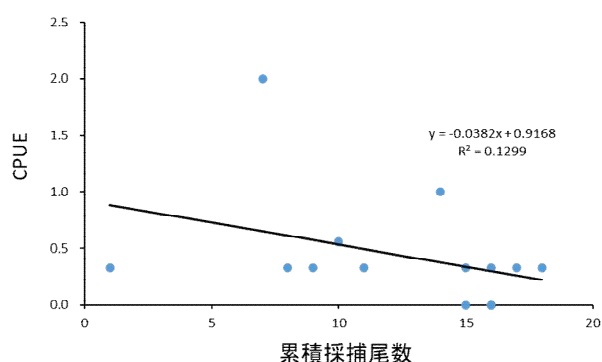


図 累積採捕尾数と CPUE の変化